

府中市市民協働推進講演会  
**人と地域の結びつきがまちを変える！**  
高円寺阿波おどりに学ぶまちづくり

講演会要旨

1 開催概要

□開催日時：平成26年4月14日（月）18時30分～20時00分

□開催場所：府中駅北第2庁舎 3階 会議室

□プログラム：

(1) 開会・主催者代表あいさつ

村越 功一郎（市民活動支援課長）

(2) 基調講演「連携～巻き込む力～地元が動く行事づくり 失敗の積み重ねから見えてきたもの」

富澤 武幸 氏

（特定非営利活動法人東京高円寺阿波おどり振興協会専務理事・事務局長）

(3) 閉会・終わりの挨拶

大室 容一 氏

（特定非営利活動法人府中観光協会会長）

2 基調講演要旨

◆「連携～巻き込む力～地元が動く行事づくり 失敗の積み重ねから見えてきたもの」

富澤 武幸 氏

（特定非営利活動法人東京高円寺阿波おどり振興協会専務理事・事務局長）

■高円寺の現状

高円寺は駅を中心にたくさんの商店街があり、南口すぐにある「高円寺パル商店街」が私の生まれたアーケードである。平均6メートルの商店街で、店舗数は一階二階合わせると約100店舗あるが、この20年で地付きの方がみなテナント化してしまった。テナント率は約8割、これは高円寺パル商店街だけではなく、高円寺駅周辺の商店街の全てに当てはまる。今までお店を経営されていた多くの方がお店を貸してしまったが、幸いなことにいまだに住んでいる方は非常に多いため、町のコミュニティとしては残っている状態である。

■高円寺でなぜ阿波おどりがはじまったのか

今は8月の第4土曜・日曜に開催している。今年は8月23日・24日になるが、一日50万人のお客さんが来る。踊り手は1日6,000人。この高円寺阿波おどりが始まったきっかけからお話させていただく。

昭和20年の太平洋戦争により高円寺は焼け野原になり、現在の被災地と同じような状況にあったといわれている。みな死に物狂いでお店を立ち上げ、昭和30年代に入ると二世たちが「青年部」を立ち上げた。彼らは町全体のことを考え始め、戦火を逃れた阿佐ヶ谷の七夕に刺激を受け、日本全国を旅しながら、自分たちの町に一番合うイベントを探し始めた。その中で仙台の七夕こそふさわしいと思い開催したが、お客さんは阿

佐ヶ谷の七夕へ流れてしまった。さらに模索を続けるが、「お神輿を担ぐ」「盆踊りを踊る」という提案も、高円寺の街路事情と経済的事情から断念した。熟慮の末、「見たことはないが、四国の徳島では踊りながら道を歩ける踊りがあるらしい」との提案から、高円寺阿波おどりが始まることとなった。

#### ■ばか踊り誕生

高円寺阿波おどりの練習は日本舞踊の師匠に習うことから始まったため、本物を知らずして稽古に励んでいた。そのため皆不安を感じ、自分たちの踊りを「阿波おどり」と呼ぶことがはばかられたことから、「ばか踊り」と称してお祭りを開催していた。しかし、本物の阿波おどりに出会うため江東区の深川に行き、県人会から踊りを教わり始めた。

#### ■最初の試練「警察の反対」

今とは異なり区画整備がしっかりとなされていなかったため、車の有効な道路である商店街を封鎖して商店街のPRだけのために阿波おどりをすることに、警察から反対された。しかし、「確かに商店街のPRではあるが、本来の意味は氏神様への奉納という神事である」と主張することにより、警察からの道路使用許可を得ることに成功した。

#### ■阿波おどりに魅せられて

県人会から阿波おどりを習い始めたが、太鼓の練習は丸太やタイヤを用いて行い、最後まで本物の太鼓を叩くことはできなかった。しかし、その中で徳島県の県人会から、「徳島の大切な郷土芸能である阿波おどりを、自分たちを卑下して“ばか踊り”と呼ぶのではなく、これからは堂々と“高円寺阿波おどり”と名乗ってください」との言葉を受け、ついに「高円寺阿波おどり」に名称を変更。

町の賑わいのために行っていた阿波おどりだが、いざお祭りが始まるとお客さんが店の入り口をふさいでしまい集客が増加しない問題があった。また、踊りの練習や役所との打合せなど準備に非常に時間を要することや、その時期に多い大雨の浸水による中止など多くの問題を抱えていた。しかし、一人の広報担当者が涙を流し「1年間かけて準備をしてきたのに、なぜすぐに中止の決定をするのか」と抗議したことが、高円寺阿波おどりの分岐点となった。すでに多くの方が高円寺阿波おどりに魅せられていたことがわかった。そして、昭和39年には阿波おどりの本場徳島へ行った際に撮った8ミリの画像を見て、本場の踊りの迫力や町の雰囲気には驚愕し、さらに高円寺阿波おどりに真剣に向き合うことを決心する。

#### ■成長と拡大

時を同じくして高円寺ルック商店街と純情商店街でも阿波おどりがはじまり、完成した都市計画道路を会場に取り込み、昭和40年代終わりには高円寺全体が阿波おどりの会場になった。そして新たに多くの「連」が立ち上がり、商店街以外の方も多く集まるようになり、参加者が増加していった。そして「連」が徳島の「連」と連携するようになり、本場の技術をより多く取り入れていくこととなる。また、下北沢や経堂など多くの町も阿波おどりに注目し始め、40箇所以上で次々と開催地が生まれていった。

#### ■矛盾の萌芽

高円寺阿波おどりは短期間で成長したため、その分問題点が噴出してしまった。規模

が大きくなったことにより地元の商店街の方など役員に負担が集中したことや、商店街と自治会の寄り合いだったため中樞がないことが問題となった。前例踏襲で精一杯となり、お祭りの全体を把握している人が一人もいなかったのである。

#### ■バブルの崩壊とともに顕在化した問題点

バブルの崩壊とともに歳入が不足し始め、商店街のテナント化と役員の高齢化により人手不足が深刻化し始めた。さらに安全・安心徹底の強化依頼とごみ処理費の必要性から、支出の増大による圧迫が大きな問題となった。ごみ処理問題では、多いときには2日で30トンのごみが出て、中には電子レンジや自転車、タンスが捨てられていた。そして振興協会は慢性的な赤字体制のなか、それを支える地元の商店街とは対立構造を深めていってしまった。

#### ■再生への道

小学6年生のころ、住宅地に住む友人の誘いにより付き合いで阿波おどりに参加した。全体像を把握している人がいないという問題点を客観的に見つめ、20代の頃から役員や役所と関わってきた。そこで高円寺阿波おどりをなくさないために、全体像を把握して資金の流れを透明化する組織として、NPO法人化を提案した。次に、収入源の確保のために「地元」「参加連」「観客」に注目をした。決して無理をしないでほしい旨を伝えた上で、地元には分担金・会費として、参加連には参加費として、観客には栈敷席を協賛費の寄付として阿波おどりを資金面で支えてもらう形となった。栈敷席を設けて収益を得ることに警察からの問い合わせもあったが、NPO法人として利益を分配することはなく、すべて高円寺阿波おどりにあてることを説明し、理解を得た。

次に、行政との連携を進めていった。当時、高円寺阿波おどりは商店街が行ってきたため行政と連携するという発想は生まれなかった。しかしバブル崩壊後、歳入不足のため行政からの補助金等の存在はないか連絡を取り合っており、行政に引っ張ってもらう形ではなく、背中を押してもらう様な関係を検討し始める。すると市役所の中でも「連」が成立し始め、高円寺阿波おどりを後押しする流れが生まれはじめた。そこで区の施設を使って舞台公演をすることが決定し、区の共催という形で実現したのである。

#### ■東京高円寺阿波おどり組織図

高円寺阿波おどりは参加者や踊り手からも参加費をもらっており、阿波おどりが近くなるとボランティアや行政、警察、消防、交通機関、後援企業、そして実行委員会を立ち上げ、阿波おどりを開催している。

#### ■壁にぶつかると「ひと」が現れる

困難に直面したとき、いつも「ひと」が現れて助け舟を出し、一緒に行動しようとしてくれた。一番初めて出てきてくれたのは、清掃事務所の統括技能長だった。お祭りが出るごみを事業ごみとして処理する費用の負担を求められて窮していたとき、駅前清掃で技能長に声をかけられた。相談した結果、技能長がごみを取り扱ってくれることになった。

次に出てきてくれたのは、東京都中小企業振興公社の指導員。阿波おどり振興協会の組織活性化委員会のファシリテータとして中心的な役割を果たしてくれた。

次に、NPO 初代理事長が出てきてくれた。地元で人望の厚かった方が区議を引退した後、理事長としてきてくれた。

そして最後に、ボランティアをどのように集め動かしていくか思案していたところ、徳島出身の大学生が現れた。全ての会議に出て資料を読んでもらい、この行事はどうあるべきなのか、そのためには何をすればよいのか、そして今年、あなただったら何ができるかを聞いた。すると、ボランティアを使う小隊長チームと、各会場をつなげるネットワークをつくると提案。

#### ■ボランティア組織の誕生と成長

17人の大学生から始まったボランティアに、高円寺阿波おどりで取り組みたいことを聞くと、「ごみ問題に向き合いたい」と主張。そこでごみ収集をひとつのパフォーマンスにすることを決め、阿波おどりの列と列の間でごみを収集し、分別・売却したのち、その収益をインドへ送ることとなった。この取組は現在小学校とも連携しており、親や祖父母を通して広がっている。

そして「本場との連携」という思わぬ副産物が生まれ、行政同士の連携も始まった。

#### ■ボランティアスタッフのコアチーム

毎年お祭りが終わると、核のチームで打上げ会がある。そのときに来年のリーダーが発表され、11月から毎月1回ミーティングが行われて、その中で次の年に何をやるか考えている。そして、最大の仕事である「ごみ」に立ち向かうのである。

#### ■行事と街の価値を高める

「連」をお願いしておもしろいポスターを作っただけで展示したり、混雑により阿波おどりを見られない方のために、駅前にスクリーンを設置してその様子を映したりした。来ていただいた方に感謝の気持ちを伝えるため、高円寺の良い印象を持って帰ってもらうことを目指し、行事と町の価値を高めていった。

#### ■高円寺阿波おどりの目指すもの

東日本大震災を期に、高円寺阿波おどりにタイトルをつけることになった。第55回は「がんばろう日本、東日本大震災復興支援」と言うタイトルにした。しかし、高円寺阿波おどりの目的は、お客さんに踊り手の笑顔と情熱を感じ取っていただきたいということである。そのため、第56回は「笑顔に出会いたい」というタイトルをつけた。昨年のタイトルは「この街に咲く」。我々が一番大切にしていることは、地元住民の満足である。一番ご負担をお願いしているからこそ、ごみや騒音など問題があっても、この町に高円寺阿波おどりがあってよかったと言っていたきたい。そのために我々は何ができるか。

震災後の第55回高円寺阿波おどりは、電力不足により15時から18時までの昼間の開催だった。しかし、多くの人の笑顔を見て、やってよかったと思った。

#### ■進行中の企画

来年フランスで阿波おどりを開催するために、現在企画を重ねている。ルイヴィトンの本社にプロジェクトマッピングで阿波踊りを映し出すなどを考えている。

以上